

来る日も来る日も句会と茶会に明け暮れて、あつという間に三月が過ぎた。

再び江戸に行くというミチを、今度は誰も止めなかった。ただ、中山道を行くと言うと誰もが反対をした。遠回りになる上に、道中難所が多いという。

特に傘狂は、揖斐川を下って七里の渡しで東海道に出るように、とうるさくミチを説得した。だけどミチにはどうしても中山道を行きたい訳があった。

長逗留を詫びていとまを告げるミチに、すっかり大人になった傘狂の孫娘佳世が、これを連れて行ってください、と何かを両手にくるんで差し出した。

見ると掌にすっぽり収まる蛙の縫いぐるみだった。佳世が三日をかけて仕上げたものだ。

「きつと帰る、必ず帰る。忘れずに帰って来て下さいね」そういつてミチを覗き込む黒目がきらきらと輝いている。そして、それまでに必ず俳諧の腕をあげて待っていることも忘れずに言い添えた。

傘狂の家族に見送られて通りに出た所で、おとよと村の衆が数人待ち構えていた。

泣き虫おとよは、まだ挨拶も交わしていない内からもうしやくりあげている。息子の竹蔵に「おふくろ、みつともない

じゃないか」とたしなめられても収まるふうにはなかった。ほとんど何を言っているのか分からないおとよの別れの挨拶と、村の衆の励ましを受けて街道に出た。

十一年前はこの道を西に向かった。今日は東へ歩く。きつぱりと晴れ渡った夏空に小さな雲が一つ浮かんでいた。

今日の道連れはこれに決めた。

ワラジが乾いた土を噛む音が聞こえるだけで、風は無かった。旅は順調に始まったようだった。だが御嶽宿を過ぎたあたりから時々咳き込むようになった。

急にどうしたのだろう、と思う。そういえば四、五年前に一度、激しい咳に二日ほど寝込んだことがあった。医師の心得が有る父由永の見立てによると、労咳ではないが喘息の気が有る、ということだった。

咳が出るだけで熱が出る様子もなく、他に格別異常を感じないのでそのまま旅を続けたが、一気に大井宿まで歩くつもりを諦めて手前の大湫(おおくて)宿で宿に入った。

昨夜世話になった鬼岩温泉の主が、大湫宿の先には「十三峠におまけが七つ」といわれる難所がある、と教えてくれたのが気になっていた。

しかも御嶽を過ぎてからの道はほとんど深い山の中の登り下りが激しいつづら道だった。行く手にはそれよりもっと厳しい道が待っている。咳が出ることでもないので無理はす

まい。

夜中に何度か咳の衝動で目が覚めた。払いを済ませ前かがみでワラジの紐を結んでいる時も激しく咳き込んだ。

見兼ねた年の行った女中が

「大丈夫かね、この尼さんは」とぶっきらぼうな言葉を投げ、お義理で背中をさすったが何の効き目もなかった。

それでもミチは丁寧な礼をいって、大湫の安宿の敷居をまたいだ。

途端に、じつとりと湿り気を含んだ生暖かい空気を吸い込んで、また激しく咳き込んだ。

旅籠を出ると間もなく、道は鬱蒼と茂る木々の間を心細くくねって、その先は陽の射さない黒い樹海の奥へと消えていた。

透かして見ても空は見えない。その上、暗いだけではなく、噂通り上り下りの激しい坂道の連続だった。

一刻ほど歩いただろうか、再び急な登りにかかって思わず大きく息を吸い込んだ。

途端に暫く収まっていた咳がぶり返した。呼吸を細くく意識して、一度に大量の空気を吸い込まないように気を付けていたのに、しくじってしまった。

止まらない咳で目の前が真っ暗になった。よろめく体を支えようと伸ばした手が何かに触れた。何か判らないが手に触

れた物にすがって押し寄せる咳に耐えた。

胸の奥からひっきり無しに得体のしれない拍動が立ち上がって、喉を絞るように咳となって飛び出していく。

止めたくても止まってくれない。頭の中も胸も焼け付くように痛んで、呼吸すら十分に出来なかった。

ふと、このまま行き倒れてしまうのではないかと、痛む胸の中を不安がよぎった。

喉と胸が焼け付くような咳がようやく落ち着いて目を開けると、ミチがしがみ付いていたのはうす暗い木陰に立っている地蔵だった。

助かったようだ、と安堵したミチだったが、気付くとその地蔵には首が無かった。

驚いて周囲を見回した。夢中で寄り掛かった際に首を転がしてしまったかと辺りを見回したが、どうやら元々首が無い地蔵のようだった。

そう気づくとミチは、萩から三田尻に向かう途中でも首の無い地蔵を見かけたことを思い出した。

何か訳が有るに違いないと微かに思う。だが、今は、そのことはどうでもよかった。

咳込んで随分疲れたらしく異常に体が重い。このままでは立ち上がれそうもなかった。少し体を休めたいと思った。

地蔵の脇に道を背にして腰をおろした。すると、たちまち地の底へ引きずり込まれて行くような甘美な誘惑に襲われ、

地藏に抱かれるようにして眠ってしまった。

どれくらい時間が過ぎただろう、野太い声で揺り起こされた。朦朧とした意識を辛うじて集中させ振り向くと、そこには額に深い皺をきざんで黒く日焼けした顔の老人がミチを覗き込んでいた。

「尼さん、えらい疲れてるようやな。この峠道は男でも大変や。一里ほど先の茶店まで行くから荷台に乗って行ったらええ」

そう言うて半ば気を失っているミチに声をかけたのは、牛に荷車を曳かせた炭焼きの老人だった。頬かむりの中から優しい目が笑っている。

茶店の半年分の燃料を届ける途中だと言った。丁寧に礼を言つて重い体を引きお越し、荷台の空いた隙間に炭俵に体をもたせかけて腰をかけた。大きな安堵がミチを包んだ。

老いた炭焼きの腰は曲がり気味だった。だけど股引きからのぞくふくらはぎは、木の根つこのように角張つて逞しく、継が当たった筒っぽからは、備中鍬を思わせるごつく節くれだった手が見えていた。

男はその頑丈な手で腰に下げた布袋をさぐり、芋飴を数粒つまみ出すと

「バアさんが作ったもんで見てくれは悪いが美味しいで」と言いながらミチに渡した。

なるほど、一寸足らずに小さく刻まれた飴は、炭のかけら

と見間違ふほど真つ黒だった。だが、咳に苦しめられていたミチの喉には何よりの良薬だった。

荷車の揺れに身を任せ、口一杯に広がる濃厚な芋の香りを楽しんでみると、先ほどまで行き倒れてしまうのではないかと案じられたことが嘘のように穏やかな気持ちになった。そしてゆつくりと、再び眠気が近づいて来た。